

『住吉浜祭り』参加報告

森 敦史

1. はじめに

筆者は、平成22年以来、神戸市内を流れる住吉川の河口（「住吉浜」と称される）で毎年5～6月に開催されている『住吉浜祭り』に、生きもの観察のガイド役としての要請を受けて参加している。ここではその様子を報告する。

2. 市民参加型環境イベントとしての『住吉浜祭り』

近年、海の生態系と陸の生態系は個々に完結したものではなく、主に河川を通じた物質循環を介して互いに連環している、との認識が広く定着してきている（例えば、京都大学フィールド科学教育研究センター、2011, 2012）。また、昨今では、地域の海の環境問題（保全、修復、創造など）に取り組むにあたって、これまでのように行政組織と事業者が協働するだけで

なく、そこに流域の市民も参画するのが一般的になりつつある（例えば、瀬戸、2009）。

住吉川は、六甲山南麓に源を発し、兵庫県神戸市東部に位置する東灘区の市街地を急傾斜でほぼ直線的に流れ、大阪湾（神戸港）に注ぐ都市河川である。この住吉川流域においても、いくつかの市民団体が協働して「森～川～海を結ぶ都市型河川の自然再生」との理念を掲げ、流域環境の調査、保全、啓蒙等の活動を活発に行っている。例えば、『ブナを植える会』が中心となって「落葉広葉樹を植樹して多様な混交林とし、防災機能が強く生物多様性に富み、川や海に豊かな栄養をもたらす森づくり」を目標に実施している植林活動、『住吉川清流の会』が中心となって「川と海を回遊するアユを指標種とし、アユの棲みやすい川づくりを通じて生物多様性に富んだ川づくり」を目標に



図1 住吉川河口付近の様子。河口の近くに架かる島崎橋から左岸の遊歩道に下りて、下流側を撮影。河口右岸を中心に干潟が形成されている。前方の海上には阪神高速道路湾岸線、右岸上には六甲ライナーが走る（筆者撮影）。



図2 同じ場所から見た上流側の様子。川は撮影地点では汽水域の様相を呈しているが、島崎橋を少し遡ったところにある緑に覆われた中州の辺りから、淡水域の様相へと一変する（筆者撮影）。

実施しているアユの生息調査や魚道設置事業（例えば、関・島本, 2010）、『神戸川と海を考える会』が中心となって「産業利用が優先され住民が近づきにくい河口域における、安全で快適に潮干狩りや磯遊びが楽しめる、生き物を育む里海づくり」を目標に実施しているアサリの生息調査（例えば、里野・島本, 2010）などがそうした活動として挙げられる。以下に紹介する『住吉浜祭り』も、それらの活動の一環である。

住吉川の河口域（図1、2）は阪神間の港湾区域に位置し、長年にわたって産業利用が優先されてきた結果、海岸線はコンクリートの垂直護岸で囲まれ、地域住民が気軽に自然に親しむことが難しい人工海岸となっている。しかし、河口には小規模ながら砂礫質の干潟が形成されており、アサリをはじめ40種を超える底生生物の生息が確認されている（里野・島本, 2010）。人工的な港湾区域内に残されたこの貴重な自然に、潮干狩りや磯遊びを通して、地域住民、とくに子供たちが接する機会を設け、身近な自然である住吉浜に対する親しみを持ってもらうことを目的に始められた市民参加型イベントが『住吉浜祭り』である。

本イベントは『豊かな森川海を育てる会』や『神戸川と海を考える会』が中心となって運営され、平成22年を皮切りに毎年開催されてきている。開催時期は5月下旬から6月上旬の大潮の時期に設定され、実施時間は昼間の干潮に合わせて2時間ほどである（図3）。運営スタッフは、各市民団体の役員、近隣の水族館の職員、大学や中学校、高校の教員とそこの学生ボランティアといった面々で構成され、当社の大阪支店からも今尾支店長や私がお手伝いに加わっている。いっぽう、参加者は近隣の親子連れや子供たちなどで、130～300人もが集まるなかなか盛大な催しとなっている。

祭りではこれまで、掘り出したアサリの重さコンテストといった娯楽・ゲーム性の強いものから、パネルを使った外来種の解説や水環境についての紙芝居といった教育色の強いものまで、毎回さまざまなコーナーが用意されてきた。そのなかで毎年必ず設けられているのが、参加者に自由に、もしくは目標とする生物をいくつか設定して、水生生物の観察と採集をしてもらう時間帯である。私はそこで、干潟を巡回したり、本部席に待機したりしながら、子供たちや親御さんか



図3 河口干潟に立つて海側を望む。開会前、一般道の高架下本部席を設置しているところ（筆者撮影）。



図4 子供たちと一緒にタテジマイソギンチャクを観察する筆者（写真提供：豊かな森川海を育てる会）。



図5 生物観察中の本部席の様子。質問にやってくる親子連れが引きも切らない。画面右側、白いシャツの後ろ姿は今尾支店長（写真提供：豊かな森川海を育てる会）。

らの数々の「これなに??」に答えるガイド役を仰せつがっている（図4、5）。小学生以下の子供たちが中心となって行われるいわば磯遊びなので、採集物がアサリ（持ち帰って食べられる）とカニ（遊んで楽しい）



図6 平成25年調査で確認された在来種のハマグリ¹の立派な生個体。兵庫県版レッドデータブック2003ではランクA（絶滅危惧1類に相当）評価の貴重種。小学生の女の子が見つけたもの（筆者撮影）。

にどうしても偏ってしまうのは致し方ないところではある。それでも、貴重種（図6）を含むさまざまな動植物が毎年30～40種以上は確認されているので、子供たちといえども大勢で一斉に定性調査を実施することはそれなりに有効である、と私には感じられる。

3. 『大阪湾生き物一斉調査』への参加

この『住吉浜祭り』の生き物観察会は、平成24年からは『大阪湾生き物一斉調査』に参加するという形で実施されるようになり、さらに平成25年にはその調査定点の一つとして正式に登録された。

『大阪湾生き物一斉調査』は、大学・市民団体・国および地方自治体等で構成される「大阪湾環境再生連絡会」が、大阪湾の沿岸で活動する団体の協力を得て、市民と一緒に大阪湾各地の生き物を一斉に調査するという活動で、平成20年（2008年）を第1回として毎年実施されている。なお、「大阪湾環境再生連絡会」は国土交通省近畿地方整備局神戸港湾空港技術調査事務所を事務局とし、大阪府、兵庫県、大阪市、神戸市、堺市などの行政機関、関西国際空港株式会社、大阪大学、神戸大学、さらには多くの市民団体などが構成団体として名を連ねている。調査は毎年春から初夏にかけて実施され、すべての調査結果がとりまとめられた後、その年の秋に報告会が開催される。第6回調査にあたる平成25年は、明石海峡大橋のもとにある兵庫県神戸市垂水区の舞子の浜から、大阪湾最奥部といえる大阪市港区天保山や、淀川河川敷にある十三干潟（河口より約7km上流に位置し、梅

田・キタのビル群が目に見える）を経て、大阪府のほぼ最南端にあたる岬町の豊国崎や、淡路島側の兵庫県洲本市まで、大阪湾沿岸のほぼ全域を網羅する全23カ所で、5月下旬から6月下旬にかけて調査が行われた。参加者数は22団体1,375人にのぼった。調査結果の発表会は9月23日に大阪市立自然史博物館にて開催された。

住吉川河口は、兵庫県の調査定点数が大阪府に比べて少ないという事情から、県内に新たに増えた貴重な定点の一つとなっている。『大阪湾生き物一斉調査』に参加するようになってからというもの、『住吉浜祭り』の生き物観察の時間帯には、水族館の職員さんや中学校・高校の生物部員、および私などが中心となった調査メンバーが、それまで以上に本腰を入れて定性調査をするようになった。とくに平成25年は、中・高生たちがかなり頑張って魚類採集をしてくれたおかげもあって、例年を大きく上回る70種もの動植物の出現が記録された。

4. おわりに

初めての開催から4年を経過した『住吉浜祭り』は、子供たちの親水のためのイベントという意味合いだけでなく、“生物指標を用いた市民参加による大阪湾のモニタリング”の一端を担うという役割ももつようになった。こうした取り組みが今後も継続されていくことを期待したいし、私も微力ではあるが協力していきたいと思っている。

最後に、本稿の年報への掲載を快諾いただき、また写真を提供してくださった、『NPO法人豊かな森川海を育てる会』理事長の島本信夫氏に深謝いたします。

参考文献

- 京都大学フィールド科学教育研究センター（編）. 2011. 改訂増補 森里海連環学-森から海までの統合的管理を目指して-. 京都大学学術出版会, xvi + 371 pp.
- 京都大学フィールド科学教育研究センター（編）. 2012. 森と海をむすぶ川-沿岸域再生のために-. 京都大学学術出版会, xiii + 337 pp.
- 里野晶子・島本信夫. 2010. 住吉川の自然再生に向けた里海づくりのための調査活動. 共生のひろば, 5: 39-40.
- 関 桂一・島本信夫. 2010. 住吉川の自然再生に向けたアユの棲みやすい川づくりのための調査活動. 共生のひろば, 5: 41-42.
- 瀬戸雅文（編）. 2009. 市民参加による浅場の順応的管理. 恒星社厚生閣, 161 pp.